

研究ノート

中南米論と中南米ビジネス論、講義内容の考察—その1

杉 山 雅 浩

はじめに

I. 中南米の特殊性

II. 中南米論から中南米ビジネス論への考察

III. 中南米（ラテンアメリカ）の具体的内容とフレームワーク

結び

はじめに

2006年度より本校では、これまでの「地域論」を「地域論（前期）」と「地域ビジネス論（後期）」の2つの講座に分けて実施されることになった。世界の全地域がこの方針に統一された訳でないが、特に「経営学部」としての独自性、またより実学的（ビジネス的）視点が重要視される地域より、この方針に基づいた講座が順次開講されることになった。例えば「中南米論」については、前期が「中南米論」後期が「中南米ビジネス論」として、理論的・学問的要素は当然として、グローバル化社会におけるより実践的なビジネス的見地が鮮明に打ち出された。この方針により、これら地域を担当する教員も、これまでとは異なった「講義内容・授業の進め方」などが要求されることになった。本「研究ノート」は、初年度である2006年度の講義実績を踏まえ、将来的にどのような方向と内容で進めて行くことが、この方針にマッチし、また生徒の理解度・満足度を深めて行くことが出来るのかといった課題を考察するものである。具体的には、筆者が担当する「中南米」を事例にその概論の整理を試みたものである。これら目的から本研究ノートの大半は、著名な中南米研究者の書籍を参考、引用し、それに筆者の実務経験を加味した「講義資料の素材」として捉えていただければ幸いである。整理、引用に当たっては、文中必要に応じて（注）を記載するが、それ以外の参考、引用部分については、巻末に参考・引用文献の一覧として掲げ（注）の代用とする。なお本研究ノートを「その1」としたのは、今回は次に続く

「ビジネス論」を念頭に「地域論」に重点を置き、その概要を参考文献に添った形で整理しまとめたことにある。

I. 中南米の特殊性

2007年1月、本校において全学部を対象とした、「第一回全学研究発表会」が開催された。同研究会において、筆者は「マーケティング事例への背景とアプローチ —発展途上国を中心として—」の題名で発表することになった。その中で中南米の特殊性を代表すると思われる言葉として¹⁾：

*Latinoamérica es la tierra de mañana.

*Méjico está demacisado cerca a Los Estados Unidos, pero demasiado lejos de los díos.

の2つの言葉を最初に挙げた。これは、もしこの言葉の意味を30分以上に渡って語ることができるようになったなら、中南米に関する研究者として多少の自信を得ることができるであろうとの個人的見解によるものである。この言葉はあえて辞書を引くまでもなく30年以上に渡って頭の中に存在した言葉である。これは大学でのスペイン語学習を通し、また10年以上に渡る駐在経験（メキシコ・ベネズエラ・ブラジル）、20年以上に渡る中南米と

1) 直接的日本語訳は、「ラテンアメリカは明日（希望）の土地（国）」、「メキシコはあまりにもアメリカに近い、しかしあまりにも神からは遠いところにある」。文献等は定かでないが、無意識的に頭のなかに残っていた言葉。要はこれら言葉には中南米の歴史を背景として、現在の中南米の諸々の問題を表す意味合いがあると考え

のビジネス経験の中で、無意識的に頭のなかに残っていた言葉である。主張したかったことは、上記スペイン語の日本語訳ではない。研究者として、また企業実務の経験者として、この言葉の背景の中に、中南米の「特殊性」「多様性」「後発性」と言ったことを痛感しているに他ならない。

企業時代に「中南米バカ」という言葉をよく聞いた。いったん中南米を担当すると、なかなか中南米を離れることが出来ない。また離れたとしても、何か問題が発生すると再び中南米に戻るケースが非常に多いからである。裏を返せば、中南米というのはそれだけ「特殊な地域」との位置づけにあるからではなかろうか。

学問の世界でも最近Interdisciplinary (学際的) という言葉が頻繁に行きかう世の中となってきた。「中南米論」を語る場合でも、単にこれまでの企業経験を生かした「マーケティング論」また「経済学的側面」だけでなく、より広い視点に立った社会科学的要因、すなわち、文化、歴史、その上に立った地域社会の、また個人的価値観まで踏み込んだ研究と考察の必要性を痛感している。「経営学」との観点では、経験的にも学問的にも中南米はまさにこれら要素を満たす学問分野に値する地域であるのではと考えている。

II. 中南米論から中南米ビジネス論への考察

中南米論を担当し多少とも困惑した問題、また企業の実務経験を通じたなかで、その時点ではあまり認識していなかった諸々の課題・反省点を考えてみた。双方の課題を考察してみることが、理論的・学問的分野と現実的な企業活動における経営の諸問題への架け橋となり、より実践的な講義内容を構築できであろうという理由である。あまり物事を複雑にしないため、ごく初歩的な感想また課題を挙げてみる。

1. 実務経験のある者にとっては当たり前のことでも、講義対象となる生徒にとっては、中南米はやはり距離的要因と同様、知識的にも馴染みの少ない遠い地域であることが認識された。

2. これまで企業の実務経験を生かして何篇かの事例論文を発表してきた。そのなかで、“何故失敗したか”、“何が成功の要因であったか”、といった問題は、結果論的にその要因を検証することになったが、実務の過程ではその認識度は大変低いレベルにあったような反省がある。国際マーケティング論的に述べれば、「マルチインターナショナル」における理論的解釈の欠如である。他の言葉で述べれば、グローバリズム、市場経済理論 (新古典派理論)、といった欧米諸国にはごく当たり前の理論的根拠に基づくマーケティング手法が、ときとして当該地域の人々の誤解を招き、CS志向とは異なった結果を招いたことがあった。要は市場進出と市場開拓、そのためのマーケティング活動、などの背景にある地域特性、すなわち、進出過程における経済的時代背景と共に、当該地域の人々の慣習・価値観を形成してきた歴史・文化といった社会科学的要因に対する知識の欠如である。

これら課題と反省を踏まえ、講義の具体的なフレームワークとその内容を今後の教材として、以下の章において考察する。

III. 中南米地域論の具体的内容とフレームワーク

具体的内容のまとめに当たっての課題は、II-1で挙げた中南米に対する馴染めと理解度の現実である。中南米全体の白地図を見せ、「メキシコは、ベネズエラは、アルゼンチンは?」、「マヤ文明は、アステカ文明は、インカ文明 (帝国) は?」といった質問に対し、多くの学生が「名前は聞いたことがあるが、具体的には分からない」と答える生徒が大半であった。この事実は途上国、例えば、中近東、アフリカ、南アジア、といった地域においても同じような傾向が想像される。後期のビジネス論へのつながりを考えると、基本的知識としてどの程度の内容を具体的講義のなかで習得させて行くかの課題につながる。このような現実的課題を受け止めたとき、1つの研究著書『ラテンアメリカ研究への招待』²⁾を今一度復習し、前後期のそれぞれの

講義回数（13～15回）に応じた内容をまとめてみるのが最も現実的方策と考えた。同書は論文執筆に当たって、筆者自身大変参考になったラテンアメリカ研究における入門書的存在として愛読した研究書である。以下概要は、他の参考文献とも比較参照しながら、本書を中心として講義内容をまとめたものである。講義ではこれら概要（レジメ）に従って各種資料を作成し配布するものである。

1. 世界の中での中南米の位置づけ³⁾

- ①中南米（ラテンアメリカ）の語源と地理的定義：
- ②地理： 中南米全体（33の独立国と13の非独立領土）、主要国の地理的位置（メキシコ、パナマ、ベネズエラ、コロンビア、チリ、ブラジル、アルゼンチン）
- ③基礎的統計資料⁴⁾： 国、公用語、独立年、旧宗主国、首都、人口、面積、GDP、一人当たりの国民所得、他、の一覧表作成

2. 中南米の多様性と共通性

- ①中南米の共通軸： 文化と言語
イベリア半島（スペイン・ポルトガル）から移植された文化、先住民族社会と文化、アフリカ伝来の文化。
スペイン語 ⇒18カ国とプエルトリコ（約3億人）
ポルトガル語 ⇒ブラジル（約1億6千万人）
その他200におよぶ先住民系言語、スペイン語との二重言語、
カリブ海と周辺 ⇒英語、フランス語、スペイン語（約1千3百万人）

2) 国本伊代・中川文雄編著、『ラテンアメリカ研究への招待（改訂版）』新評論、2005年。本研究ノートでは（改訂版）以前からの同書を参考とした。

3) 同上書、『ラテンアメリカ…』序章 中川文雄著、pp.17～44。正井康夫監修『今がわかる 時代がわかる「世界地図」2005年版』成美堂 2006年

4) 同上書、『…世界地図』。東洋経済新報、『Data Bank SERIES 7 経済統計年鑑』東洋経済新報社 他関連書より講義用資料として作成した国別統計資料。

②宗教： 宗教は中南米の90%以上がカトリック信者、近年では戒律を尊重する実践者は少数派となってきた。歴史的側面では、伝統・慣習・社会の規範・価値観など政治的対立の打開と調停者としてカトリック司教の存在と権威は特別な地位にある。

③価値体系の共有における地方差・個人差： 共通性は植民地時代を通じたイベリア文化の伝統。

個人主義 ⇒個人の多様性と主張の強さ。
土地貴族的価値 ⇒肉体労働・勤勉・地道な努力より、機知や弁舌を重視。

ペルソナリスモ⁵⁾ ⇒非人格的国家より、家族・友人・身内などを重視する価値体系。

日常性からの脱却 ⇒フィエスタ、カーニバル、サッカー、歓喜・熱狂。これら項目はフィエスタを除いて大半の学生が中南米に対するイメージとして捉えていた。

④近代社会： アメリカ合衆国の影響と価値体系の変化、巨大都市化、治安の悪化、民族集団間の力の変化、国際化に伴う国外への移民。

3. 人種的多様性と混血：

（表1-1）

「中南米の人種問題は、決して人種平等の社会でないが、人間間の関係は比較的融和的であり、アメリカ合衆国のような人種を巡る激しい抗争がほとんどないことが特色とも言えよう。」（『ラテンアメリカ研究への招待』pp.43）

この事実はメキシコ駐在当時、現実を感じていたことである。特にメスティーソ社会では日本人をアミーゴ（友達）として受止めてくれた思いがある。

4. 地理的つながりと歴史的展開の関連

（表1-2）主要国と主要地域の概要。

5) 同上書、『ラテンアメリカ…』第二章 pp.71, “政治と社会の規定する重要な要素”

表 1-1

白人 クリオーリョ	白人（ブラジル南部、アルゼンチン、ウルグアイ、チリ、コスタリカ） 現地生まれの白人
インディオ	先住民（インディアン）
メスティーソ	白人+インディオ=混血（メキシコ、ペルー、グアテマラ）
黒人	奴隷制度時代アフリカから連れてこられた約9百万人のアフリカ系黒人（ブラジル、北東部、カリブ海）
ムラト	白人+黒人=混血（ブラジル、カリブ海）
サンボ	先住民+黒人=混血（ブラジルではカフーズ）

（出所）『ラテンアメリカ研究への招待』pp.40～59、その他関連書より作成

表 1-2

① ブラジル：	大陸国家でそれ自体小世界をなし、且つ固有の言語と文化を有する。経済的規模では、メキシコに続いて第二位の位置づけにある（GDP4,923億ドル、一人当たりのGDP2,778ドル ⁶⁾ ）。
② メキシコ：	国土、人口とも大きく、アメリカ合衆国に隣接し、しかし、それ自体独自の小世界をなす。経済規模は中南米で最も大きい（GDP6,261億ドル、一人当たりのGDP6,121ドル ⁷⁾ ）。経済関係は「NAFTA」との関連を含めビジネス論にて扱う。
③ 中米地域：	かつて1つの連邦をなし（グアテマラ総督）その後も同一の亜地域に属するとの意識が高い。
④ カリブ海地域：	植民地支配が長引き今日でもヨーロッパ・アメリカ合衆国に強く依存、過去の奴隷制プランテーションの結果として、人種的・民族文化的にアフリカに由来する要素が大きい。
⑤ アンデス諸国：	ベネズエラ～チリ、アンデス山脈を背景とし、独立戦争と19・20世紀の歴史を通して相互に関係する。直近ではベネズエラのチャベス大統領を中心として左翼傾向が強く、アメリカとの関係が懸念されている。
⑥ ラプラタ地域：	ラプラタ川流域にあり（アルゼンチン・ウルグアイ・パラグアイ）、殖民の歴史で多くの共通点を有し、相互接触が大きい。

5. 歴史の概要

地域論またビジネス論を語るにあたって、1つ1つの歴史的区分は大きな意味合いを持ち、それぞれの時代が現代社会にどのような影響をもたらしているか、またビジネス展開の際、他の地域との比較において、どのような特殊な要因をもたらしているかが理解できる。ビジネス経験のなかでは、これら要因を学問的また理論的に学ぶことはなかった。しかしこれら歴史的要因を知ることが、現実のビジネス展開においても大変重要な意味を持つことが分かって来た。具体的には、「他の

地域、例えば東南アジアでは通用した手法が、なぜここ中南米ではうまく行かないのか？」といったごく日常的経営実務のなかで感じたことである。

以下の節・項では、中南米の時代区分：

先コロンブス時代⇒植民地時代⇒独立国家の時代
の概要に添ってその要点を整理した。

(1) 先コロンブス時代

1492年コロンブスのアメリカ大陸発見以前の歴史である。本項では文化的側面のみに焦点をあて、著名な文明の概要をまとめたものである⁸⁾。

6) 同上書、『…世界地図』pp.67

7) 同上書、『…世界地図』pp.67

メソアメリカ文明

(表1-3) 地域 ⇒ 中央高原(メキシコ)、メキシコ湾岸、オアハカ盆地、マヤ地域

アンデス文明

(表1-4) 地域 ⇒ アンデス山脈の中央部(現在のペルーとボリビア)
紀元前1000年～16世紀初め(スペイン人によるインカ帝国征服まで)

表1-3

形成期	紀元前1500年～紀元前300年ごろ 農耕定住社会の出現(前800年～前300年)オルメカ文化を母体とする。 この文明が各地で新たな文明を開花する ⇒ 古典期
古典期	紀元前300年～900年ごろ(マヤ文明、テオティワカン文化) マヤ地域(ティカル、パレンケ)中央高原(テオティワカン)オアハカ盆地 神権政治の下で神官達が階層社会を支配 大ピラミッド・神殿群・球技場・絵文字・暦 ⇒ 天文学、数学ゼロの概念 マヤ文明の衰退(900年～)理由 ⇒ 諸説あるも定説はない テオティワカン文化(メキシコ中央高原)⇒人口約20万の都市国家 テオティワカンの崩壊 ⇒ 紀元650年ごろ ⇒他の諸文化への連鎖反応
後古典期	メソアメリカ文明の衰退から勃興 11世紀～16世紀初頭 トルテカ族の南下 ⇒ 11～12世紀 トルテカ・マヤ時代(トルテカ王国) 12世紀後半トルテカ王国の分裂・衰退 アステカ文明(帝国)⇒現在のメキシコ市(テスココ湖) 1519年～21年にかけてエルナン・コルテスによって滅ぼされる

表1-4

形成期	紀元前4千年～前1千800年 定住社会の出現 ひょうたん、かぼちゃ、唐辛子 ⇒トウモロコシの栽培 チャビン文化
古典期	紀元前後～紀元700年ごろ ジャガイモ、サツマイモ アンデス斜面の耕地化⇒ティワナコ文化、ワリ帝国 海岸地帯⇒ナスカ文化
後古典期	15世紀～16世紀 インカ帝国(ペルーのクスコ) コロンビア～チリ(4,000キロに渡る) 王位をめぐる2人の息子の内部対立を利用し、フランシスコ・ピサロによって滅ぼされる

8) 同上書、『ラテンアメリカ…』pp.50～55。国本伊代著、『メキシコの歴史』新評社、2002年、pp.33～58, “第一章 古代メキシコ”。増田義朗編、『ラテン・アメリカ史Ⅱ、南アメリカ』山川出版社、200年、pp.16～ “先スペイン期の南アメリカ” など参照して作成。

先コロンブス時代は、むしろ考古学分野として、諸々の研究者による各文明また新たな文明の研究が進んでいる。あえて現代との関係で述べれば、先住民であるインディオの存在、その後の征服時代・植民地時代を通して進んできた人種的混血が現代社会の価値観において、どのような形で存在し、またその影響はどのようなものであるか、といった視点で考察してみると興味深い。

(2) 植民地時代

ビジネス論との関係で考察すると、時代区分のなかでも約300年に渡る植民地時代を検証・考察することは大きな意義がある。現代においてもよく語られる「中南米気質、特殊性、価値観、」といったことは、この時代と密接な関係にあり、その影響は計り知れない要因が存在すると考えられる。

植民地時代を大きな区分で別けると、「征服の時代（コロンブス到来～16世紀半ば）」、「植民地支配の構図」、「植民地経済の発展」「植民地時代における人種別身分制度社会」⁸⁾などに分けられよう。これら各要因をみると、現代の中南米社会における諸々の問題との関連性がある程度結びついてくる。以下に各区分をキーワード的に整理してみた。この過程で気が付いたことは、現実の市場調査・開発、合併企業の事業運営などにおいて、前述した「何故??」といった疑問に対する多くのヒントが浮かんで来た。これらヒントとは、「経済的要因」は当然として、「社会の規範」「慣習」「社会的・個人的価値観」などに関連する社会科学の側面である。理論的側面に従ったつもりのマーケティング手法、日常の経営業務、などにおいて、理屈ではなかなか説明できない諸問題に遭遇した。「こんなことが、何故?」と反感すら感じていたことが、実は、「現場主義」、「CS志向」といったローカルにおけるマーケティング理論・手

法を真に理解し実践していなかったことの証明ではなかろうか。例えば、中南米を表現する言葉として「アスタ・マニャナの国（明日まで、明日ね…）」がある。悪く言えば「無責任さ」を意味する言葉である。「なぜこのようなことが日常茶飯事におきるのか?」といった疑問が、前述の「植民地時代」における各要因を研究することによってその一端を理解することができるのではと考える。

征服の時代（コロンブス到来～16世紀半ば）

主たる考察要因：

- ①先住民の劇的な減少 ⇒ 半世紀の間に半分から十分の一に減少。主たる原因は征服者によってもたらされた麻疹、天然痘、流行性感冒。
- ②エンコミエンダ制（寄託）インディオの労働力と租税を調達する権利が国王から与えられる。その後エンコミエンダ制は廃止されるが、現実問題として先住民は過酷な労働と徴税に苦しむ。

植民地支配の構図

征服者による植民地支配の構図としては次のような要因が挙げられるが、約300年という長い支配が現在の社会的構造、社会的価値観の背景にあり、多大な影響をもたらしていることが感じられた。人種別身分制度などは法的・実質的に20世紀になって崩壊するが、社会構造的また社会的価値観として、その影響はつい最近まで存在したと言えよう。筆者は1970年代から80年代前半、メキシコを中心として中南米の市場開発、現地企業（合併会社）の事業運営に携わるが、この時「何故? 不理屈!」と感じたことが、まさにこの植民地時代の諸制度に由来しているような思いがある。

主たる支配構図：

- ①スペイン植民地の「副王制」 ⇒ 16世紀前半に本国の国王の代理として派遣された副王による統治制度。約300年に渡って続く。副王の権限としては、司法機関、行政機関、財務機関、軍事機関の統括。当初副王領は「ヌエバ・エスパーニャ副王領（メキシコ～カリブ～中米）」と「ヌエバ・カスティーヤ副王領」（リマ～

8) 同上書、『ラテンアメリカ…』pp.50～55。国本伊代著、『メキシコの歴史』新評社、2002年、pp.33～58, “第一章 古代メキシコ”。増田義朗編、『ラテン・アメリカ史Ⅱ、南アメリカ』山川出版社、200年、pp.16～ “先スペイン期の南アメリカ” など参照。

チリ)であったが、18世紀に入りヌエバ・カスティージャは「ヌエバ・グラナダ副王領(ベネズエラ・コロンビア)」と「ラプラタ副王領(アルゼンチン周辺地域)」に分割される。

②アウデンシア ⇒出先機関の相互監視として設けられた曖昧な統治機関。

③カピタニア制⁹⁾ ⇒「ポルトガル領(ブラジル)への到達は、15世紀のカブラルの漂着に遡るが、制服の時代を経ず1520年代以降北東部海岸への殖民の時代に入り、カピタニア(行政区)、ついで総督制を導入する。

両宗主国の共通性:

①宗教保護権 ⇒植民地経営では、カトリック教会が植民地支配の重要な機関として機能した。両国の国王はローマ法王から「宗教保護権」と呼ばれる教会を監督・保護する権限を受ける。

植民地経済の発展

①スペイン領の特長 ⇒「エルドラード(黄金郷)」として、16~17世紀初め銀鉱脈が次々と発掘され16世紀末の生産量は全世界の80%を占めるに至る。

②ポルトガル領の特長 ⇒17世紀いったん鉱山ブームは衰退し、代わって土地への資本投下がなされ、「アシェンダ」とよばれる大私有地・大農園が広がる。信者の寄進によって教会は莫大な土地を所有することになり、16世紀後半よりブラジル北東部の砂糖生産は、17世紀にはヨーロッパ消費量の半分近くを供給することになる。この影響で労働力を補うため、アフリカより黒人が導入され「奴隷制度社会」が形成される。18世紀にはブラジル中西部で金・ダイヤモンドが発見され、奴隷制度の加速を促す。

③「重商主義政策」⇒アメリカ大陸と本国の貿易には一部の王室と特権商人(特権階級)だけが利権を握り少数の裕福層と大多数の貧民層という階層社会を形成する結果となる。カリブの海賊はこれら質

易に付随して発生したものである。

このような経済発展は後に「植民地型二重経済」「従属論」「南北問題」などとして多くの経済開発理論に継承されて行く¹⁰⁾。

植民地時代における人種別身分制度社会

この時期、奴隷制を基盤とする人種別身分制社会が形成されるが、各人種の定義については、Ⅲ-3(表1-1)を参照願う。本項では身分制度社会における「法律」と「現実」の実態についてその特徴を記す。

① 法律的観点での身分制度は、「白人」→「インディオ」→「メスティソ」→「黒人」→「奴隷」の順となるが、現実的には、「白人(イベリア半島人・クリオーリョ)」→「メスティソ」→「黒人」→「奴隷」→「インディオ」の順になる。現実において奴隷がインディオより上位の階級にあるのは、奴隷が高い代価を払って買われて来た事による。

②スペイン人社会とインディオ社会における差別社会とブラジル社会
 スペイン人社会 ⇒都市、生産基地のアシェンダ、鉱山地域
 インディオ社会 ⇒農村社会、バリオ(都市周辺の指定された地域)
 ブラジル社会 ⇒一握りの白人、約200万人の輸入された黒人奴隷、高度な先住民がいなかったため先住民はそれほど重要視されなかった。

こうした身分制度社会が実質的に崩壊するのは、独立達成後も長らく年を経た20世紀に入ってからである。しかし特に経済的・社会構造的側面では、現代社会においてもその名残が多く、の国々に存在することは実務的経験から感じたことである。

(3) 中南米諸国の独立への歩み

19世紀に入り各地で「独立」が急速に進むことになるが、その核心的原因は以下のよう

¹⁰⁾ 詳細は、杉山雅浩、「マーケティング事例への背景とアプローチ—発展途上国を中心として—」『環境と経営』(静岡産業大学論集)、第9巻 第2号、pp.46~50 を参照。

⁹⁾ 同上書『ラテンアメリカ…』pp.314

スペイン領における直接的原因

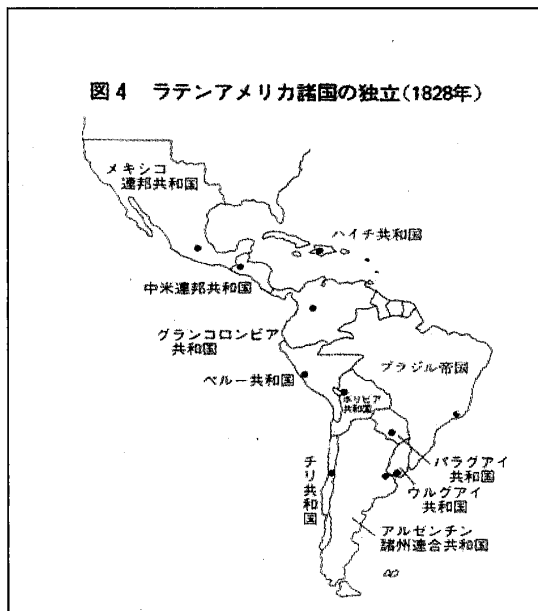
- ①1808年ナポレオンによるイベリア半島侵略をきっかけとして本国（スペイン）国王の退位による植民地の副王庁への影響。
- ②植民地での独立軍と副王軍との間で数年に渡る戦い。
- ③1813年スペイン本国で発令された「ガディス憲法」¹¹⁾。本憲法は「自由主義的憲法」「君主制の廃止」「植民地を平等に扱う平等主義」などの基本理念に基づく。本憲法が植民地王党派の力を弱める結果となる。

りブラジルのリオデジャネイロに構える。

- ③1820年国王ジョアンはリスボンに戻る。ペドロ王子はブラジルに残り、王子を取り巻くブラジルのエリート達は王子を擁立してブラジルの独立を決意し、1822年ペドロ一世を国王として君主国家としての独立を果す。

スペイン領、ポルトガル領、いずれの場合も直接的原因としては、ナポレオンのイベリア半島への侵略がきっかけとなる。その他国家の独立に関しては「中南米各種統計資料」のなかに記載した。

図1-1 ラテンアメリカ諸国の独立



(出展)『ラテンアメリカ研究への招待』
pp.61 図4を引用

上記図は、1811年のパラグアイ独立から1828年ウルグアイ独立の間における九つの国家に分離独立を示す図である。

ポルトガル領の場合

- ①スペイン領のケースと同様、基本的にはナポレオン軍のポルトガル侵攻が原点となる。
- ②ポルトガルのリスボン王朝は、上記侵攻に伴いイギリス軍の支援の下にブラジルへの脱出を試み、その首都を14年間に渡

(4) 独立後の近代化と従属化

カウディージョの時代¹²⁾：

「スペイン系諸国の多くは独立からほぼ半世紀に渡って政治的混乱を経験した。各地で武装集団を抱えるカウディージョと呼ばれる実力者が台頭し、政治の争奪戦を繰り広げた。歴史的にはこの時代を「カウディージョの時代」と呼んでいる」。一方、「政治的には「中央集権体制派（植民地時代の特権層の利益を温存させ、カトリックを国教として国作りを目指す集団）」と「地方分権主義派（地方分権を主張して連邦制を求める集団）」の二つの勢力が政治的混乱を増幅した」。

近代化への制度作りと課題

19世紀半ばになると、「カウディージョの時代」を脱し、「自由主義勢力」が実権を握り、欧米諸国をモデルとする近代化に向けた制度作りが取り組まれた。

- ①1880年代の経済発展 ⇒ 欧米市場に向けた資源開発に外国資本が殺到した国々は急激な経済成長と政治的安定の時代を迎えた。
- ②外国資本投下はおよそ86億ドル¹³⁾と推定されるが、その60%はイギリス資本が占め、フランス・アメリカがそれに続いた。これら対象国は外国資本に対し手厚い優遇政策を与えた。これら条件が整った国として、ブラジル、チリ、アルゼンチン、メキシコの4カ国が挙げられる。

11) 同上書『ラテンアメリカ…』pp.61

12) 同上書『ラテンアメリカ…』pp.63

13) 同上書『ラテンアメリカ…』pp.63

- ③**モノカルチャー経済構造** ⇒ 他方ではこれら外国資本による経済発展は特定の産品を輸出する「モノカルチャー経済構造」を確立することになり、富の一部富裕層への集中と国民一般生活の二極化を招くことになる。

例) 鉱山資源 ⇒ メキシコ、チリ、ボリビア

熱帯農産物 (コーヒー・バナナ・砂糖) ⇒ ブラジル、コロンビア、エクアドル、中米、カリブ海

農産物 (食肉・小麦・羊毛) ⇒ アルゼンチン、ウルグアイ

国民国家形成とナショナリズムの概要・問題

- ①独立後ほぼ一世紀に渡る近隣諸国との戦争により、イギリス・フランス・アメリカの介入を招く。
- ②第一次大戦時における転換期 ⇒ 国家意識と民族意識への転換期となり、労働運動、大衆運動などが組織化される。
- ③メキシコ革命 (1910年) の成果 ⇒ 外国資本に支配された中南米諸国の大衆運動は、反帝国主義運動へと発展した。この思想を最も代表するものが「メキシコ革命 (1910年) の勃発であり、その成果が1917年憲法第27条 (土地、地下資源、水、を根本的に国家の所有とし、外国資本の接収を含む急進的政治改革) である。
- ④メキシコの影響は、やがてラテンアメリカ全体に民族主義的社会改革運動へと発展 (例: ペルーの「アメリカ革命人民同盟 (アプラ運動) 」)
- ⑤第一次大戦後は「インディヘニスム運動 (先住民を多数抱えた国々でのナショナリズム運動の表現)」がメキシコ、グアテマラ、エクアドル、ペルー、ボリビア、などで発展する。

変革と躍進の時代 (19世紀末～現代)

1929年10月ニューヨークで始まった「世界恐慌」は、その後のラテンアメリカの政治・経済体制に多大な影響を及ぼした。後期授業「中南米ビジネス論」では、この時代あたりから出発し、主要国における政治・経済体制の変化、それに伴う現地進出とビジネス上の

問題点、経営とリスク、と言った課題を取り上げて行く。この題材は「研究ノート その2」として本論と同様な形でまとめる予定である。よってここでは19世紀末から現代への大きな変革を挙げ、本「研究ノート」の最後とする。

- ①「世界恐慌とモノカルチャー経済への打撃」⇒ 世界恐慌に始まる先進諸国の経済破綻は、第一次産品の国際市場を著しく縮小し、これら輸出に頼る中南米諸国の政治・経済体制に多大な影響と変革をもたらした。
- ②この変革はその後、「ナショナリズムの高揚」「軍部の台頭」「南北問題」「植民地型二重経済」「従属論」等の命題として開発経済分野での多くの議論へとつながって行く。
- ③世界恐慌に始まるこれら危機的状況下で、中南米諸国は大きく別けると二つの対策を選択した。一つは「独裁政権の強権的政治」、もう一つは「ポプリスモ」と呼ばれる大衆動員型政治への道である (ブラジル、アルゼンチン、メキシコ、チリ)。これらの国々ではやがて「輸入代替工業化政策」を推進し国民統合の推進の諸政策を実行した¹⁴⁾。
- ④第二次大戦から1960年代前半は、汎アメリカ主義 (対米協調姿勢) と「輸入代替工業化政策」の下に多くの国々での未来は明るかった。
- ⑤1980年代半ばにかけては、左翼革新運動、軍部の台頭による軍事政権時代に突入し多くの政治的・経済的・社会的混乱を招き、1980年代には「失われた10年」と呼ばれる深刻な経済危機を招くことになる。

結び

本研究ノートは、主として歴史的・文化的側面に焦点を当て、『ラテンアメリカ研究へ

¹⁴⁾ 詳細については、同上書「マーケティング事例への…」、杉山雅浩「リスクと経営 — 発展途上国を中心として、メキシコの事例より —」『環境と経営』(静岡産業大学論集)、第11巻 第1号、2005年。などの事例を参照願う。

の招待』を主たる参考文献として、同書の内容に添った形でその概要をまとめる作業とした。後期授業「中南米ビジネス論」では、本研究ノートの最後の部分「変革と躍進の時代(19世紀末～現代)あたりからスタートし、現代の中南米におけるビジネスの現状を多角的視点より取り上げて行く予定である。多角的視点とは、筆者自身が経験した70年代～80年代の経営の具体的事例論文、また現代の「NAFTA」、「MERCOSUR」設立の歴史と実態、と言ったことを紹介し、それら事例をマーケティング論、開発経済論、リスクと経営、と言った理論的部分と相互比較検討し、実務分野における「創造性」「発想力」「変革と対応」など普遍的な重要性も説いて行きたく考えている。

直近の問題(2006年～2007年)では、キューバとの親交を深める、ベネズエラのチャベス大統領の3選¹⁵⁾、それに関連した、ニカラグア、エクアドル、ボリビア、ブラジルの左翼化と反米運動は、まさに中南米独特の背景にある「経営の反復的・定期的リスク」と考えるのは間違いであろうか。

専門分野の研究の深化、これは研究者として当然の姿勢であろう。一方で、究極的狙いが「グローバル化社会」における「マルチナショナル」を意識した経営を学ぶという筆者の思いがある。学んだことが「中南米論」だから、東南アジア、中国等のことは分らないと言ったことは、実際の企業活動では許されることではない。この課題への挑戦こそ「経営学部」としての独自性を構築して行くものと信じている。

参考文献一覧：

- 国本伊代・中川文雄 編著、『ラテンアメリカ研究への招待』新評社、2005年
 国本伊予、『メキシコの歴史』新評社、2002年
 増田義朗・山田睦男 編、『ラテン・アメリカ史Ⅰメキシコ・中央アメリカ・カリブ海』増田義朗 編、『ラテン・アメリカ史Ⅱ 南アメリカ』山川出版社、2000年
 ジェレミー・A・サブロフ、青山和夫 訳『新しい考古学と古代マヤ文明』新評論、1998年
 小池洋一・西島章次 編、『ラテンアメリカの経済』新評論、1993年
 松下洋・乗浩子編、『ラテンアメリカ 政治と社会』新評社、2004年
 内橋克人・佐野誠 編、『ラテンアメリカは警告する』新評論、2005年
 絵所秀紀、『開発の政治経済学』日本評論者、1997年
 G・ホステード 岩井紀子・岩井八郎 訳『多文化世界』有斐閣、1995年
 正井康夫監修『今がわかる・時代がわかる「世界地図」2005年』成美堂、2006年
 Gerald M.Meier, *Leading Issues in Economic Development Sixth Edition*, Oxford University Press, 1995. (松本宣明・大坪滋訳『国際開発経済学入門』勁草書房)
 東洋経済新報、『Data Bank SERIES 7 経済統計年鑑』東洋経済新報社、2005年

¹⁵⁾ 「チャベス氏『反米』けん引」日本経済新聞、2006年2月5日。「コカ葉を国章に、ボリビアで検討」静岡新聞、3月14日